

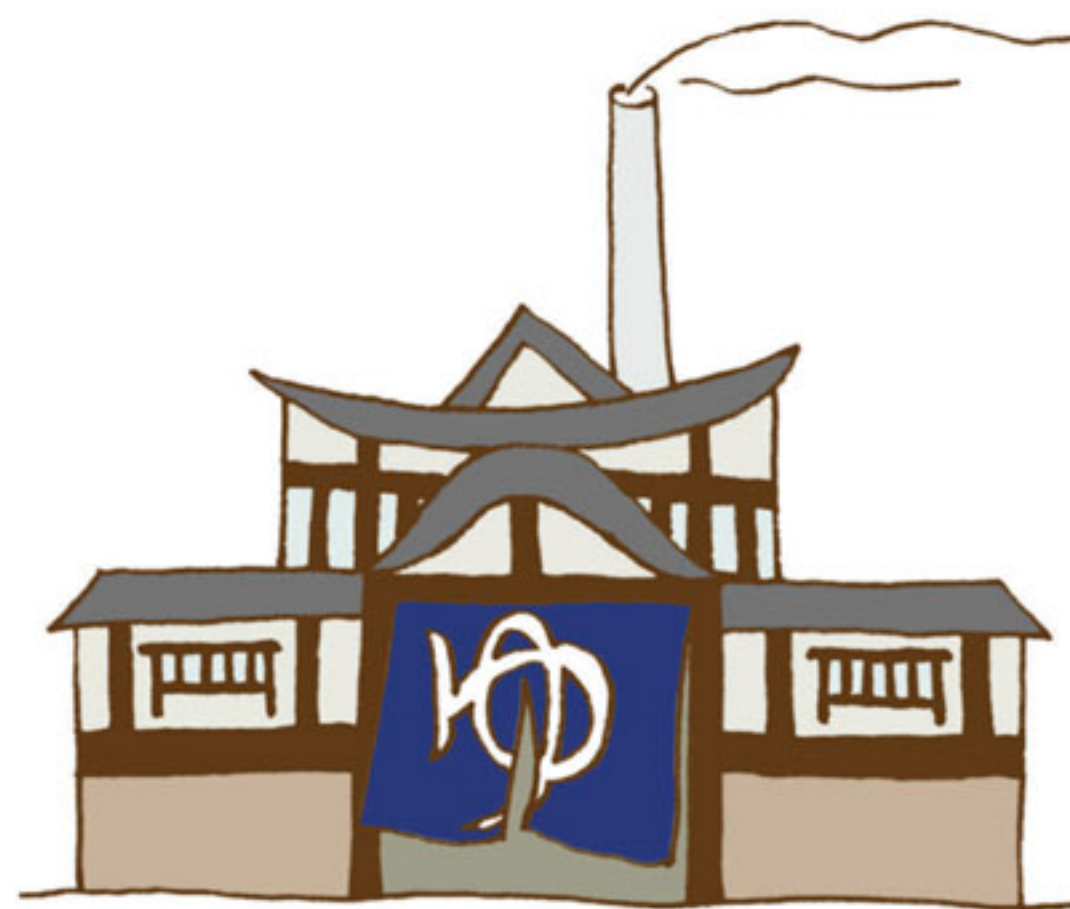
湯は急激にその数を減らしているのが現状である。

では下関の銭湯事情に目を向けてみると、現在でも13軒が営業している。このことは全国的にみても特異な例といってもよいだろう。ではいったいなぜ港町に銭湯が多く集中しているのがあるのか。実はこの疑問に関してはかつて私が長崎の茂木港で「寺下湯」を訪ねた時の女将さん、中本ミキエさん（大正14年生）の話によると、漁師たちにとって銭湯とは、体の汚れを落とすだけではなく、漁師間の情報交換の場でもあったという。仕事の後に銭湯に来て天候のこと、明日の仕事のこと、漁場の情報入手等の場所として重要な役割を果たしていたということである。

その他私の調査によると、農村から比べると燃料にする薪などの調達が難しい、体に常に潮風が当たり仕事も重労働のため筋肉痛となる、筋肉疲労には熱い湯に入るのがよいとされている等が挙げられる。また、下関は単に

漁港ということだけではなく、かつては北前船が出入りし、また貿易港として栄えた、ということも大いに関係していると思う。

今回はまず、下関漁港に近い「日乃出温泉」を訪ねた。ご主人の吉本太



一さん（昭和12年生）によると、かつてこの付近は海で、大正から昭和初期にかけて埋立地となった。銭湯のある場所はかつて小さな島のあったところで、先代は網元で「日乃出丸」という漁船を所有していたことから屋号もそ

こからつけたという。当初は船員の厚生施設としての入浴場だったが、網元をやめてから一般客向けの銭湯として昭和28年に開業、その後昭和34年に正式に温泉施設となり、平成9年に全面改装をして現在に至っているという。泉質はアルカリ性単純泉。効能は、神経痛、筋肉痛、疲労回復というから漁師さんにとってはうってつけの温泉ということとなる。

「えびす湯」は前回15年前に訪れている。創業は大正5年で現在の建物は昭和25年頃というので私と同年ということとなる。外観は前回にはなかった女性側入口に目隠しのパネルがある以外はそのままの姿であった。脱衣場も大村崑さんのホーロー看板が同じ場所であり、当時の姿を留めていたのが印象的だった。他にも、昭和30年代から使用されているマッサージ器などが、銭湯の定番としてしっかりとその役割を果たすべく堂々と置かれているのが嬉しい。

一方浴室は前回来た時以降に改装さ

僕の触覚がビンビン動き出す

下関銭湯探訪記

文／町田忍

加えておく。

さて本題の下関における銭湯についてであるが、実は私は15年前に下関の銭湯巡りをしていた。当時7軒ほどを訪ねているが、すでにその中の銭湯も3軒が廃業している。中でも新地町の「新富湯」は下関としては規模も大きく木造で風情ある銭湯だが、本年の7月末日に廃業してしまっていたが、建物はそのままの姿で残っていた。

ところで全国津々浦々の銭湯を巡っているときいろいろなことがわかってくる。たとえば番台の高さは東京が一番高く平均1m30cmで湯の温度も一番高いとか、沖縄の銭湯は脱衣場と浴室の境が無くすべてシャワーである等々といったことであるが、その他に重要な特徴として、港町に銭湯が集中して多いということだった。北海道の小樽、函館、東北地方では気仙沼、茨城県の大洗、千葉県の浦安（一ヶ所から三本の煙突が見える）、長崎県の茂木（港沿いの道約1kmに4軒あった）、

しかし現在に至ってそれらの地区の銭

全国の銭湯巡りを始めて29年目に入る。外国人の友人を近所の和風宮造り銭湯に案内した時の「銭湯はなぜお寺のような形をしているのか？」という質問に端を発し、それ以降急に銭湯が気になってきた。その時思ったことは、異文化の人の質問は意外と的を射ていることもあるものだ、ということであった。その後全国津々浦々、北海道から沖縄県まで約2900軒ほどの銭湯を訪ねてきた。

ところで銭湯といえばあの宮造りで浴室正面に巨大な富士山のペンキ絵のある場面が有名である。しかしそれは主に東京を中心とする地域の銭湯の定番様式といえる。

宮造り銭湯を多く手がけてきた浅草

に住む大工の棟梁・飯高作造氏（76歳）によると、大正12年の関東大震災の復興期に、宮大工の技術をもつ棟梁の津村享右氏がその技術を導入して豪華な宮造りの銭湯を建てたという。ちなみにそれ以前の銭湯様式は、質素な町屋造りだった。その豪華さから東京中の評判となった。その結果それ以降建てる東京の銭湯の多くがこの宮造り様式となった、ということが判明した。

地方にある温泉などの宮造り様式は、仏教が布教のために庶民に入浴の機会を与えた、という意味からのもので、東京のそれとは発祥が異なっている。また浴室の富士山の絵の発祥は、大正元年、東京神田猿樂町にあった「キカイ湯」であることを参考までにつけ